

先進企業や難関大学も注目する

多摩美の課題発見力

2 個性派漫画家が続々と生まれる場所



新ビジネス創出を目指し
起業家育成
早稲田大学



AI技術を活用した
サービスデザインの研究
DeNA



新進気鋭のアーティストを
SNSでプロモーション
avex



ビッグデータをデザインで可視化
**トレタデータ
サイエンス研究所**

新しいマーケットを見つける発想力 ▶P.4-5



NGOから示された
発展途上国問題への取り組み

**ATI(H^(アティ)国際協力
プロジェクト**

日本各地における
環境問題の抽出と解決の提案

**町田市
日南市
奈良市**



地域や国の魅力を引き出す力 ▶P.8-9

先進企業や難関大学も注目する 多摩美の課題発見力

本質を見つける力が課題解決を導く!

社会的な課題が複雑化し不安定さを増す昨今。経済界では、効率だけを追い求めるMBAを代表とする論理的思考だけでは戦えなくなったと言われ、日常生活の中でも地域格差や弱者に対する課題など、従来の仕組みやルールだけでは解決が難しい課題が山積み。そんな状況に対し、多摩美の教育の中で培われてきた「観察し、課題を発見し、形にすることで課題を解決する力」に注目が集まっています。30年の歴史を数える産学官の多方面にわたる連携授業の中で、期待される課題の領域はますます広がりを見せています。

人の気持ちをすくいあげる力 ▶P.6-7

医療現場の課題を
デザインで解決する試み
昭和大学



障がいのある方に向けた
展示方法の提案

国立科学博物館

水まわりの課題解決
TOTO



2

いつもの当たり前を驚きに変える力 ▶P.10-11



TOKYO2020に向けて
新しいメディアを作る
朝日新聞社

3

食の問題を体験のデザインで解決
オイシックス・ラ・大地



補助足袋の価値を広げ、
ホテルの着衣として発信
福助

新ビジネス創出を目指し起業家育成 早稲田大学

2017.07 ~ | 早稲田大学=高田祥三教授、島岡未来子准教授、堤孝志客員教授、飯野将人客員教授 連携学科=プロダクトデザイン(安次富隆教授、大橋由三子教授)



「アイデアの事業化に必要な教育が多摩美にあった」

文部科学省による次世代起業家育成事業の一環で、昨年7月、主幹・早稲田大学とプロダクトデザイン専攻の協働による連携講座「ビジネスアイデアの『表現力』を鍛えよう!」が実施され、早稲田大学ほか立命館大学、東京理科大学の学生と多摩美生の混合チームによる、起業家育成を目的としたグループワークが行われました。「シリコンバレーでデザインの重要性が増している(堤孝志先生)」という世界的な潮流を背景に、多摩美の課題発見力と解決に導くプロセスに着目した早稲田大学の島岡未来子先生が声を掛けたことから連携がスタート。「ビジネスにはないと思われていたクリエイイトする手順というものが、プロダクトデザインの分野にはすでにあった(飯野将人先生)」と評価する声もこの連携に期待されました。昨年10月に行われた最終発表では、各グループが投資家の前で新ビジネス案をプレゼン。その中から、鍵をなくさないための新商品や、サプリメント販売の新サービスなどが、同じ10月に大隈大講堂で開催されたシンポジウムでも発表されました。

多摩美生の具現化するスピードに圧倒
創造理工学部4年 細倉結衣さん
私たちは何かを作ろうとイメージしても、まず材料の質を考えたり、CADソフトでちゃんと設計するところから入ったりと、難しく考えがちですが、多摩美の学生は速やかに絵にし、プロトタイプも1日で形にする。思考のプロセスや言葉で具現化する力を感じました。

将来の、協業の可能性に期待
商学部3年 須永悟隆さん
意見交換中、多摩美の学生がカッターでササッとプロトタイプを作り上げたのには驚きました。手を動かしながら考えを練り上げ、そこからアイデアを広げていくプロセスが新鮮でした。将来起業したとき、どこかで協業の機会があるかもと期待しています。

多摩美に教わったアイデアの広げ方
基幹理工学部4年 清水南良さん
美大の、思考の柔軟性や視点に触れたくて参加しました。イメージを絵や形にすることでアイデアが広がることを知り、特別講座で企業の開発現場におけるデザイン思考の重要性を学んだことで、エンジニアとしてのコミュニケーションの取り方がイメージできました。

多摩美生の声
思考プロセスの差を実感
プロダクトデザイン3年 谷川原結衣さん
モノとヒトとの関係性から考える私たちに、早稲田の学生は、実際に商品化された状況を想定してアイデアを展開させます。思考プロセスが大きく異なり正直当初は葛藤がありました。回ごとに互いを理解し、相乗効果を生みながら進行する過程が刺激的です。

それらの評価を経て、今年も連携講座が実現。昨年に続き、今回も多摩美の学生を含む混合チームが6グループ作られ、「学生生活をより良くする“紙”の提案」をテーマに新ビジネス案を探りました。今年は昨年のカリキュラムに加え、主に早稲田の学生を対象とした安次富隆先生の特別講座「ビジュアルライゼーション・テクニックを学ぶ」が行われ、「プロトタイプを作る上で、絵はコミュニケーションの方法の一つ。画力やセンスは問題ではない」ことを伝授。「相手に伝えることを目的とした絵の描き方、柔軟な思考や視点によるアイデアの広げ方」を実践的に教えることで学生たちの発想や手段の幅を広げるなど、多摩美の学生が備えているスキルを共有することで、より専門性の高い講座内容となりました。「デザイナーの力が生かされる現場は、目に見える表現力が求められる所に限りません。多摩美の学生は普段から課題を制作する過程において、何かを生み出す環境の大切さや相手に“伝える”ということへの思考が鍛えられているので、チームの雰囲気づくりや経過報告レポートにしても、何も教えなくても、無自覚のうちに実践できていましたね。これも、課題解決へと導くための重要な力です(安次富先生)」。

T O P I C

投資家や企業幹部、著名人の前でもプレゼン



プロダクトデザイン4年 西川佑樹さん

昨年実施された連携講座に参加しました。それまで課題設定からプレゼン発表に至るまで一人でやり遂げるのが当たり前だったこともあり、最初は異分野の学生との協働そのものに、違和感はありませんでした。でも途中で安次富先生に「デザイナーの仕事はチームの中核となってデザインの方で伝えることだ」とアドバイスされ意識して努めたところ、だんだん調和されてチームが出来上がっていきました。最終的には投資家の方たちの前でプレゼンをしたほか、ラジオの人気番組で著名人を前に発表したり、早稲田大学商議員フォーラムに招かれるといった経験も。予想以上の成果を得ました。就活時、この時得た学びと成果を履歴書に書こうとして、あり過ぎて書ききれずがくぜんとなりましたが(笑)、整理して臨んだ結果、希望した企業は全て書類審査が通りました。その後、望んだメーカーから内定を頂くこともできました。改めて、社会から得た評価を実感しています。

新しいマーケットを見つける発想力

人々が見ておしごちな情報に着目し、まだ誰にも気づかれていない課題を可視化し、存在しないサービスを提案する発想力は、ビジネス創出の第一歩。いま、国内外の企業が「ゼロからイチを生み出す」力を求めています。

AI技術を活用したサービスデザインの研究 DeNA

2018.04 ~ 2018.07 | 連携学科=情報デザイン(吉橋昭夫准教授)

AIを理解し、答えのない課題に挑戦

「このプロジェクトは情報収集から始めましたが、AIという新たな技術をどう生かせばいいかは分からない。問題を即座に解決させるだけがゴールではなく、どう生かしてより良くなる可能性があるのか、いわば、『答えのない課題』へのチャレンジです(吉橋昭夫先生)」。7月の成果発表会では、DeNAで企画開発に携わるデザイナーのほか、AIエンジニアも参加して行われました。空いた車両に乗りたいと思う乗客や、駅構内の混雑緩和の助けにもなる『電車で絶対に座りたい人のためのAI』、買い物時、手にした食材を用いた献立が

映し出されることで料理を考える悩みを解消する『未来てぶくろ』など、各々が得られる体験(UX)を発表。参加したDeNA社員からは「人を楽しませたいという純粋な発想や視点が面白く興味深い」、「ビジュアルで説明されると印象に残りやすい。実社会においてもプレゼンではとても有利」など、着眼点や提案の内容、プレゼン方法に対し、評価の声が聞かれました。



新進気鋭のアーティストをSNSでプロモーション avex

2018.06.24 | 連携学科=統合デザイン(米山貴久教授)

新たなプロモーションのアイデアを創出

avex所属アーティストBeverlyのプロモーションを創出する課題に、統合デザイン2、3年生20名が取り組みました。テーマは、「SNSでシェアしたくなるコンテンツ」。既存写真に面白いデザインを施したものがSNS上で話題となる現象を利用して、「Beverlyの写真デザイン」の力でアップデートさせ、SNS上でシェアしたくなるようなコンテンツ」作りに、学生と社員混合チームで取り組みました。今回は1日限りの実施でしたが、実際のアーティストプロモーションや新規事業プロジェクトへの参画を見据え、今後の協働の取り組みが期待されています。



表彰式にはBeverly本人も登壇し、学生に直接最優秀賞が手渡された。

ビッグデータをデザインで可視化 トレタデータサイエンス研究所

2018.05 ~ 2018.09 | 連携学科=情報デザイン(永康康史教授、山辺真幸非常勤講師)

デザインによるデータ活用の促進に期待

予約/顧客管理サービス「トレタ」から提供された飲食領域のビッグデータを用いて行われた「データビジュアルライゼーション」の授業で、普段なかなか取り扱うことができない複雑なビッグデータをプログラミングでどう表現するかという課題に取り組みました。学生は完成した作品から飲食業界の予約データにおける意外な特徴を発見するなど、データ活用の新たな可能性を感じさせました。将来的に、飲食業界におけるデータ活用の促進や効率的な経営の実現が期待されています。



医療現場の課題をデザインで解決する試み 昭和大学

2018.04 ~ | 昭和大学=三橋幸聖講師、渡部喬之講師、鈴木久義教授、鈴木憲雄教授 連携学科=プロダクトデザイン(大橋由三子教授、山本秀夫非常勤講師、重野貴非常勤講師、安次富隆教授)

病院見学や自助具の体験を通して対象者に寄り添う

昭和大学と本学とは、2016年10月に包括連携協定を締結して以来、積極的な連携活動を行っています。その一環として、昭和大学保健医療学部作業療法学科の授業「身体障害作業療法技術論」に、プロダクトデザイン専攻の学生が参加。病院の見学や障がいのある方へのインタビュー、実際に使われている意思伝達装置や麻痺の残る方のための自助具(福祉用品)を使った調理を体験したり、医療の専門的な見識を深めるなど、課



題解決のために合同で取り組む連携授業を行いました。6月に行われた病院見学では、実際に自助具の必要な在宅生活を送っている方から、生活の中で困っていることをヒアリングし「室内移動の際に杖の置き場がなく、立てかけてもすぐに倒れてしまい、何度も身を屈めて取らなければいけない」という日常動作の課題が挙がったことから、この課題を解決する道具を、両校混合のグループで検討。出されたアイデアを元に、昭和大学の渡部喬之先生が「吸盤と粘着材を組み合わせ杖に固定できるもの」を作り、それを杖につけたところ、「どんなところにも安定して使えるため、非常に良い」と喜ばれ、そのまま自宅で利用頂くという成果を得ました。

機能改善だけでなく心理面まで考慮した提案

7月に行われた成果発表会では、多摩美の学生がおのこの作品を映像やパネル、試作品で実演しながらプレゼンしました。日常生活の困難さから引きこもりがちなる方も外出するのが楽しくなる自助具の提案や、身体的機能が制限されたなかでも扱える楽器や財布の提案、モノではなく行動のシステムを変えることで心理的負担を軽減する提案など、多様なアイデアを披露。昭和大学の鈴木久義先生は「私たち保健医療専門の人間

左=「アウトドアウェア」プロダクトデザイン3年・釣谷淳さん 右=「雨具」プロダクトデザイン3年・谷川原結衣さん
両作品とも、片麻痺を想定し、片手で脱ぎ着できるよう工夫されています。最終プレゼンでは片手で装着する様子を実演しました。



昭和大学の実習室で、実際に使われている意思伝達装置(肢体不自由および音声言語機能障がいのある人が意思表出のために使うコミュニケーション機器)に触れたり、自助具を使って片手でじゃがいもをむく調理体験をしたりと、使う人の姿を想像しながら、課題を探りました。



はADL(日常生活動作)に注目しがちですが、外に出ることが楽しくなるような“あそび”の大事さに気付くなど、異分野から学び合えることが多いと感じました」と語り、学生たちの発想を評価しました。また両大学の先生とも、「これからは異なる専門領域の人たちが、共にイノベーションを起こしていく時代。ぜひ、両大学混成チームによる研究を実現させたい」と、今後への期待を語りました。



成果発表会では、1人1作品ずつプレゼン。昭和大学の教員と学生は作品を実際に手にとって試したり、質疑応答を通して提案への理解を深めました。

昭和大学生の声



情報からアイデアを生み出す力を実感
保健医療学部3年
伊藤めぐりさん

多摩美の学生は、たとえ対象者についての医療的な知識がなくても、情報から想像をふくらませアイデアを生み出していくところが私たちと違う、と感じました。また、発表のためにしっかりと事前準備をしていることにも驚きました。

多摩美生声



差異が組み合わされた良い手応え
プロダクトデザイン4年
寺永有希さん

昭和大学生は、対象者を専門的な視点から理解するところから入りますが、思考を重ねモノをイメージし始める私たちは、目的は同じでもまったくアプローチが異なります。ワークショップでは、お互いの差異が組み合わされたような、良い手応えを感じました。

人の気持ちをすくいあげる力

人の気持ちに寄り添い、その人の立場で見渡したとき、単に機能性や造形美だけでない「デザイン」が生まれます。あらゆる状況に対応し、より良い暮らしをかなえる創造力が、福祉の現場で求められています。

障がいのある方に向けた 展示方法の提案 国立科学博物館

2016.09 ~ | 連携学科=情報デザイン(楠房子教授)

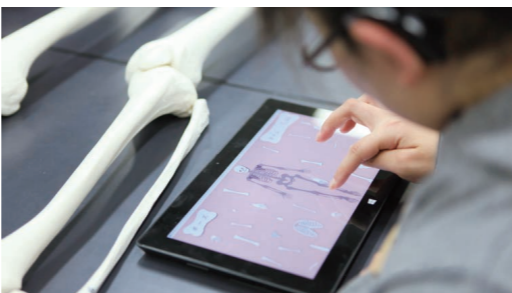
聴覚障がい者にも楽しめる工夫が実用化

東京五輪開催を目前に、障がいや能力の差を問わず利用可能なユニバーサルデザインへの意識が各所で高まっています。こうしたユニバーサルな展示手法の必要性を急務としている国立科学博物館(以下、科博)学習支援課からの声掛けにより、情報デザインコース3年の14名が「社会デザイン」のゼミで「聴覚障がい者をユーザーとした博物館の展示を支援するコンテンツの制作」に取り組みました。

「科博から、『専門家として伝えることはできるが、表現

は難しい』と、多摩美に期待されて始まった取り組みです。しかし本学には、例えば聴覚が不自由な方に映像で説明するとき、それに適したフォントやスピードの値はいくつ、といった専門的なことへのノウハウがありません。そこで神戸大学人間発達環境学研究科から科学教育分野を、筑波技術大学から聴覚障がい分野の指導を仰ぎながら研究が進められました。実用性を図るため、東京都立葛飾ろう学校の中学1年生にも協力してもらいました。(楠房子先生)

制作の対象としたのは、展示物を実物標本や模型で紹介する『モノ語りワゴン』。実際に科博で行われている展示物ですが、口頭説明のサービスで聴覚障がいのある方には不向きのため、「ビジュアルの力で説明できないか」というのが今回の課題でした。学生たちは、ただ伝えるだけでなく、楽しく、さらに興味をかき立てる仕組みを提案。動画による説明はもちろん、模型を使って触りながら理解させたり、学んだことをクイズ形



式でおさらいできるツールや、筆談やメモができ、持ち帰りもできるイラスト付きパンフレットなどを、実際にろう学校の中学生に使ってもらいました。成果発表には、ろう学校の先生方や博物館関係者など多くの方が「参考にしたい」と見学に訪れました。「非常に高い関心と社会からの期待を感じています。今後も複数の専門家が一体となって、研究は継続されます。(楠房子先生)」この授業後、卒業制作として動物園に展示の支援を提案する学生もいるなど、取り組みが広がっています。



水まわりの課題解決 TOTO

2018.09 ~ | 連携学科=統合デザイン(米山貴久教授、米田充彦非常勤講師)

ユニバーサルデザインへの取り組み

TOTOからの提案を受け、統合デザイン3年の13名が「水まわりの“困った”を“良かった”に」をテーマに取り組んでいます。学生らは9月3日、TOTOのショールームを視察。1912年の創設時から、昨年オープンGINZA SIXなど最新の製品例までを見て水まわり製品の変遷を学んだり、車椅子の方や障がいがある方用の公共トイレについて実際の製品を見ながら説明を受けたほか、社員と意見を交換。現状を把握するところからスタートしました。そして、同社の現役デザイナーに開発事例を教えてもらいながら、課題を探りました。

障がいのある方に限らず、年齢、体格、習慣の違う人々が日常的に利用する水まわりの設備や機器には、ユニバーサルなデザインが求められています。このプロジェクトは11月の成果発表会を目指して進行しています。



NGOから示された発展途上国問題への取り組み ATIH 国際協力プロジェクト

2017.07～ | 連携学科=プロダクトデザイン(大橋由三子教授)

異なる専門分野の知見を得ながら提案

昨年度より、「ATIH 国際協力プロジェクト」として、アジアにおける難民問題や災害問題などに取り組んでい



ます。昨年は5名の学生がネパールやインド、フィリピンなどが抱える課題に取り組みました。この中で高山直人さん(18年卒)は、オーストラリアにおける難民の就労支援として、若年層の独り立ちをサポートするスマホアプリを提案。提案にあたっては、現地NGOとビデオ会議を行い、上智大学で行われた国連難民高等弁務官の講演を聞くなどして難民の心理や状況を把握し、設計に生かしました。この経過発表では他のメンバーと共に慶應義塾大学湘南藤沢キャンパス総合政策学部の授業に参加し、意見交換を行いました。「課題発見の手法だけを比べても、ひとつのテーマに対してまず情報収集から入る慶應大生と、最初に解決のビジョンを持って話し合いから入る多摩美生との差が印象的でした。また、慶應大生の合理的な提案の一方で、多摩美生は人の気持ちに寄り添って意見するなど、良い刺激を与えあう場となりました(大橋由三子先生)」。提案は学内に展示公開され、ATIH 主席コーディネー

ターの打田郁恵氏、慶應義塾大学政策・メディア研究科のラジブ・ショウ教授や学生、企業の方などが見学に訪れました。今年度も5名の学生が、ATIHから提示されたバンラデシュのスラムと丘陵地帯の問題に取り組んでおり、現地NGOの計画する来年6月の実施目標に向けて、取り組みが進められています。

TOPIC

「ATIH国際協力プロジェクト」とは

ATIHはADRRN東京イノベーションハブの頭文字で、アジアにおける難民問題や災害問題に取り組む防災・医療系NGOのネットワークハブ(相互につなぐ役割の団体)です。本学は昨年度よりATIHと連携し、東アジア各地で取り組む現地NGOと共に実際の問題に対し、直接コミュニケーションをとりながら具体的な解決策を提案しています。

タイ伝統工芸の技術を生かした家具で環境問題を解決 パシフィック・リム

2006.09～ | 連携学科=プロダクトデザイン(和田達也教授)

汚染源から伝統工芸を継承する椅子に

パシフィック・リムは、本学がアメリカの協定校であるアートセンター・カレッジ・オブ・デザインと2006年から実施している国際協働教育プロジェクトです。毎年両校各10名の学生が参加し、環境保護や自然災害、伝統工芸などグローバルかつローカルなテーマを取り上げ、デザインが果たすべき役割について探究し、革新的な解決案を提示することを目指します。

2016年度はタイ・チェンマイに焦点を当て、タイ全土の大学から選抜された学生らも参加して3か国の学生がアイデアを出し合いました。各自がフィールドトリップで得たアイデアや素材を生かしたプロジェクトを提案。タイの水路を汚染するとして環境問題になっていた植物「ウォーターヒヤシンス」の繊維を利用して、タイの伝統工芸の技術で作った椅子などを制作しました。最終報告会には、タイの駐日大使も訪れるなど、注目を集めました。



これらの作品は、今年9月に東京ミッドタウン・デザインハブで行われた「ゼミ展」でも展示。慶應大生に、上述の環境問題やタイの竹製椅子の技術に着想を得た「ラウンジチェア」を説明するプロダクトデザイン4年・西村海里さん



2016年度に参加した学生たちは、タイでのフィールドトリップから、ウォーターヒヤシンスが水路に与える汚染を理解。一方で、地元の椅子職人から伝統と技術を学び、掛け合わせたことで、新たな価値を構築しました。上記チェアも西村さんの作品。

地域や国の魅力を引き出す力

日本や世界の地域が抱える、環境問題や人口減少といった社会的課題。歴史や文化、地理的な特徴など、あらゆる側面からその地域の価値を見直すことで、課題を魅力に変え、再構築する力が評価されています。

日本各地における環境問題の抽出と解決の提案 町田市、日南市、奈良市

連携学科=環境デザイン(岸本章教授、柗野俊明教授、橋本潤准教授)



地域の課題解決に自治体からの依頼が増加

国内全体の課題である地域活性化・地方再生は、特に重要なテーマの一つ。本学側からの提案だけでなく、年々自治体から本学への共同研究や提案の依頼が増えており、環境デザイン

学科では、東京都八王子の商店街活性化を目的としたとコラボプロジェクトや、使われていない鉄道高架下の空間デザインなど、これまで数多くの自治体や地域企業と協力して提案してきました。

その一例に、今年5月より東京都町田市からの依頼で3年生全員84名が参加して取り組んだ「まちだ・環境の近未来」があります。「町田市の環境からその問題点を探り、より良くなるような環境デザイン」をテーマに、10名ずつのグループに分かれて提案しました。町田市全域の中から対象地を選び、現地視察や調査を通して各々のテーマを設定し模型などを使って町田市役所の方々にプレゼンしました。

風景を生かし、不便さを魅力に変える

奈良県奈良市「ならまちプロジェクト」は、今年4月より4年生有志8名が参加。「歴史と伝統は何を根拠にどのようなデザインとして表現すべきか」まで思考を掘り下げ、現地視察のほか奈良まちづくりセンター理事長や関西大学・森隆男名誉教授(民俗学・文化人類学)にレクチャーを受けながら、住民が気付いていない魅力と改善箇所の発掘を行いました。「ならまちの入り口としての情報館周辺の整備」や「町家暮らしの新しいあり方を提案する集合住宅」など各々の提案が完成し、6月に「奈良町にぎわいの家」でパネル展示。地元の方も見学に訪れました。また宮崎県日南市からの依頼でスタートし、来年1月の発表を目指す「飢肥まちなみ再生プロジェクト」に、3、4年生の有志8名が参加。地元で「観光周遊ルートを考える」課題に取り組む高校生とワークショップを行うなど、そこに住む若者たちの目線を取り入れながら、課題発見に取り組んでいます。ほか、矢野香澄さん(18年卒)が3年生のときから独自に取り組んだ神奈川県横須賀市「やとみちプロジェクト」のように、こうしたプロジェクトを通して得た経験や学びを生かして、自らが発見した課題に対し、卒業制作として解決提案を行った例もあります。

の提案



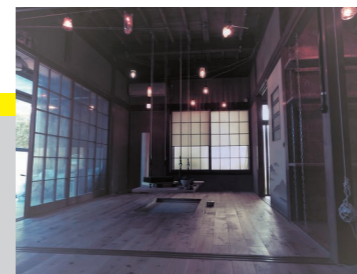
日南市 「飢肥まちなみ再生プロジェクト」2018.09～2019.01 旧城下町、日南市飢肥のまちなみ再生をテーマに掲げ、フィールドワークや地元の高中生とのワークショップ、ディスカッションを通してまちの課題を探りました。



TOPIC

横須賀市での取り組みをYahoo!トピックス、東京新聞、NHKなどが紹介

「やとみちプロジェクト」の一環で、矢野さんほか小松勤太さん、溝口ひかるさん(18年卒)が取り組んだ「やとみち民家リノベーション」。築50年ほどの空き家を、業者に頼らず自分たちで居間の畳をフローリングに替え、映像スクリーンや展示棚を設置するなど、後輩や知人、近隣住民らの力を借りて改装しました。このプロジェクトはYahoo!トピックス、横須賀経済新聞、神奈川新聞、東京新聞などで取り上げられ、NHKの首都圏ネットワークでも紹介されるなど、注目を集めました。



人口が減少し市内でも有数の空き家増加エリア「谷戸(やと)」で、空き家を利用したに拠点生活を提案。天井から吊り下げられたランプは、工芸学科の学生が手掛けたもの。



町田市 「まちだ・環境の近未来」2018.05～06 3年生全84名が参加し、「町田市の近未来の環境のあるべき姿」を提案。町田市が持つポテンシャルの掘り起こしから魅力を探り、「町田に住む人が誇りを持てるような、町田に来る人が住んでみたいような環境デザイン」を提案しました。



奈良市 「ならまちプロジェクト」2018.04～06 古い町家や由緒ある寺院と新しい住宅が交錯する「ならまち」。文化財として保存されている家や美しく維持された老舗店舗が点在する一方、多くは一般の住宅地であるだけでなく、空き地の増加など問題も起きています。現地調査を通して、住民にとっても観光客にとっても過ごしやすい美しい町を探り、提案しました。



TOKYO2020に向けて新しいメディアを作る 朝日新聞社

2018.04 ~ | 連携学科=情報デザイン (永原康史教授、清水淳子講師)

“いま”を反映したメディアの形を続々と提案し実用化へ

朝日新聞社と情報デザインコースが「ニュースの新しい伝え方」をテーマに、東京2020オリンピック・パラリンピック報道の新しいデザインの形を最終目標に掲げ、情報時代の新しいニュースメディアのデザインに取り組みました。本授業では学生22名がまず、実際の新聞を購読し、気になる記事をスクラップすることによる検証を重ねました。次に朝日新聞本社を見学し情報を発信する側に対する理解を深めた後、各自が現状の課題を抽出し、それを解決する新たなニュースメディアとして具体化しました。7月に行われた成果発表会では、「若者は情報に接する時間がない」という課題意識と「インスタ映えのように写真に撮りたくなるもの」との掛け合わせから、ドリンクカップの側面に話題のニュースを印刷することで「食事中に対話のきっかけを生む」作品や、若者の集まる場に情報との接点

を作ろうと、クラブのVJを想定し、新聞の情報を映し出す作品などを披露。デジタルサイネージに、新聞の情報を縦書きのまま読み込みランダムに表示する作品では、同社の小野玲子さんから「整ったインターフェースは街中にあふれていますが、あえて整えずに表示することで、一瞬バグの



作る

ような違和感が生まれ、思わず見てしまう面白い作品」と評価を受けるなど、課題解決につながる多様なアイデアが出されました。「すでに実現に向けて動き出している企画もあります。強く手応えが感じられることから、この取り組みを来年度も継承するよう検討中です。(永原康史先生)」



朝日新聞本社を訪れ、記者フロアや地下にある巨大な輸転機を見学したほか、双方向型ニュースサイト『withnews』の奥山編集長と現役記者によるレクチャーや、デザイン部で活躍する本学グラフィックデザイン卒業生から直接説明を受けるなどして、情報を発信する側に対する理解を深めました。



7月14日、15日に行われたオープンキャンパスで学内発表を実施。朝日新聞社関係者だけでなく、サイバーエージェントやライフルで活躍する本学卒業生のデザイナーも講師に訪れました。7月27日に朝日新聞本社にて行われた成果発表会では、各自が検討と試作を重ね完成した作品を発表。関係部署外の記者も含め同社内から約30名の社員が集まるなど、高い関心がかがえしました。

いつもの当たり前前を驚きに変える力

既存のサービスや昔からある商品に、時代や環境の変化に即したバージョンアップを施すことで新たな需要が生まれることも。見慣れたものを多角的に観察し、潜在的な価値を見つけ、捉え直す力に注目が集まっています。

食の問題を体験のデザインで解決 オイシックス・ラ・大地

2018.03 ~ 2018.07 | 連携学科=情報デザイン (宮崎光弘教授)

「若者の孤食」や「食育」への提案

これまでも「食とデザイン」をテーマにさまざまな課題に取り組んできた宮崎光弘先生のもと、オイシックス・ラ・大地と情報デザインコース3年生が食の問題を体験のデザインで解決する研究に取り組みました。契約農家や工場視察などの現地調査を通してグループごとに課題設定を行

い、日常における「食」をより豊かにするデザイン提案を映像作品や試作品にまとめ、7月に行われたオープンキャンパスで発表。プレゼンでは、一人暮らしの学生など

に起きがちな、孤食による食生活の偏りを改善するためのスマホアプリや、同社が実際に使用している宅配段ボールの新たな使い道を想定し、切り抜いて野菜が組み立てられることで子供の食育にも役立つアイデア、自分の食習慣や苦手な食材を書いて伝えることで、食に関するコミュニケーションの課題を解決できるカードなどの作品を提案。同社社員の三浦孝文さんは、「このアプリがいつかどこかで実用化されていても驚かない」と感想を述べました。また、7月20日に行われた同社内における最終発表会では、現役デザイナーを含む10名以上の社員の前でもプレゼンを行い、「もう少し深く内容を聞いてみたい」、「こんなサービスがあったら、利用者の方がワクワクすると思う」といった評価を受けるなど、大きな手応えを得ました。学生らはこうした取り組みを通じて、卒業制作のテーマにそのままつなげる者や、卒業後に食とデザインに関連する会社へ進む者もあり、それぞれの今後も期待されます。

授業では7グループに分かれ、「食」にまつわる課題の調査からスタート。世界中の食糧事情といったグローバルなテーマから日本各地の給食まで、各自が取り組みたいと思うテーマを話し合い、意識を高めました。その後は学外に出て、同社が契約する茨城の生産地を訪れて現場の声を聞いたり、日本中の食材が集まる工場の視察などを体験。社会に根差した課題を探りました。



T O P I C

企業が重視する、価値を相手に伝える力

提案作品の利用シーンを相手に伝えるため、ストーリー仕立ての動画で分かりやすく説明。それを見たオイシックス・ラ・大地社員からは、「実際に利用するイメージが持てた」といった評価などが聞かれました。前出DeNA(P4)の例同様、学生は日常の講評会などを通して、この力を鍛えています。



福助足袋の価値を広げ、ホテルの着衣として発信 福助

2017.04 ~ | 連携学科=テキスタイルデザイン (藤原大教授)

足袋の価値を新たな着こなしとして再生

「若い人の足袋離れ」という課題に対し、着物にしか合わないという思い込みを拭き、現代風の古民家をリノベーションしたホテルに映える新たな着こなしとして提案するなど、日本の伝統や技術を次世代に継承することを目的に行われた授業「WEAR JAPAN / 足元から考えるホテルの着衣」。2016年度より協力授業を実施している福助に、藤原大先生が、近年世界の成長産業となっている観光分野に注目した課題設定を提案。「足袋とホテル」をテーマに、13名が取り組みました。デザイン提案だけに留まらず、実際に製品化し市場に出すことを想定して、商品撮影の協力先となるホテルとの交渉や、堅牢度(丈夫さや安全性などの規定)の調査、福助の足袋工場への発注、プロモーション用のス



栗田瞳子さん[hanare] ろうけつ染めで描いた模様は、顔料で後加工を施して制作。ドット柄のストッキングと合わせるなど、現代での新たな着こなしを提案した作品。

タイリング撮影まで、藤原先生の指導の下、全て学生が行いました。「外国人来訪者に日本の心を伝えたい」という課題を設定し、靴にも合わせることができ、日本の古き良きものを大切に文化をデザインに取り入れた作品なども提案され、福助からは、「足袋でこんな表現ができるんだ、という発見があった」、「商品化したものもある」といった声が寄せられました。

個性派漫画家が続々と生まれる場所

多摩美には漫画を専門とする学科はありませんが、個性派漫画家が続々と生まれています。その背景には、多摩美での多様な学びと、枠を超え刺激し合える出会いが息づいています。



単に学ぶ場ではなく刺激を受け 志同じ者に出会う場所

大人気授業「漫画文化論」竹熊健太郎先生インタビュー

竹熊健太郎=多摩美術大学非常勤講師。編集家、ライター。代表作に『ビッグコミックスピリッツ(小学館)』に相原コージ氏と組んで連載した『サルまん サルでも描けるまんが教室』など、『電脳マヴォ』編集長。

ほかでは絶対あり得ない漫画がいくつも登場

2003年に開講した共通教育「漫画文化論」は、いわゆる漫画学科の授業とは異なり、漫画の描き方といった実技的な内容ではなく、作品や作家とその表現、時代ごとのスタイルや技法の変遷をたどることで、アニメ史と戦後の日本漫画史を学ぶという内容です。初年度から受講者数の最高記録を樹立したのですが、いまは抽選制で255名の学生が受講しています。もちろん中には漫画業界を目指す学生もいますが、多くはそうではなく、油画や彫刻、デザインなどを専攻する学生たちが、表現手段や素養のひとつとして学んでいるようです。ただし、授業の一番最後に提出してもらう課題は漫画作品の制作です。「漫画家を目指すわけでも描いたこともない」という学生が描いた作品には、商業誌には不向きでも、表現として面白い作品、例えばデザイナーの発想でないと絶対あり得ない作品などがいくつも登場します。

多様な表現や人との出会いが作品の糧に

いま、業界全体が過渡期にあります。媒体は紙からスマホになり、縦スクロールでの読み方が増えたことで表現方法が変わってきました。ビジネスの流れも変わります。さらに、以前は出版社への持ち込みや新人賞への応募がデビューの王道でしたが、いまネット上やコミックマーケットなど、作品発表の場は多数あります。実際に、それがTwitterで話題となって、出版社側から声掛けされるパターンも増えました。漫画家志望の人にとってはチャンスときです。しかし、厳しい



開講初年度には750人が希望し多摩美の受講者記録を樹立。現在は抽選制になるほど人気が高く、シラバスでこの授業を知って多摩美への入学を決めたという学生も。

ようですが、プロの世界とはそもそも「漫画家になるために大学で教えてもらおう」というスタンスの人にはまず無理な世界です。実際に活躍している多くのプロが、「ここで人脈を築こう」「表現の幅を広げよう」といった目的意識を持って進路を選択したと語っています。在学中に同じ志を持った仲間を得たという人も多そうですね。漫画家を目指す学生しかいない漫画学科と違って、多様な表現や人と出会えるのは、多摩美だからこそ。個性を競い合う場となっていることが、漫画家に限らず、アニメやイラストレーターなど、多くの個性派作家を生み出す理由の一つでしょう。僕はそんな才能に出会いたくて、多摩美で授業を行っています。以前は、いまより漫画を見せに来る学生も多く、学食で語り合う機会も頻繁にありました。もっと積極的に、僕、あるいは学生同士で交流を持ってほしいですね。どんどん話しかけてください。

歴代受講生の課題作品は個性の宝庫

電脳マヴォ <http://mavo.takekuma.jp>

竹熊先生が編集長を務める『電脳マヴォ』では、歴代の「漫画文化論」課題の優秀作品などが公開されています。そこには、漫画の概念やルールを根底から覆すような展開の作品や、油画や日本画の学生による圧倒的な描写の作品など、一般の商業誌ではなかなか見られない個性が多く見られます。なかには15年前に作られたにも関わらず閲覧ランキングで上位を保ち続ける作品もあり、普遍的な価値を感じさせます。



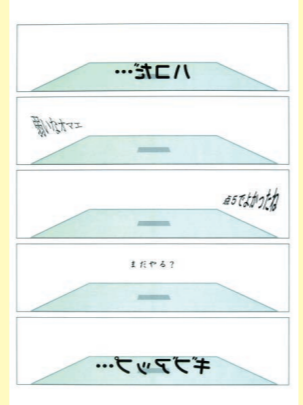
『家族喧嘩』グラフィックデザイン卒・水野清香さん。少女漫画風とリアルなタッチの混在でインパクトを与える作品。現在はイラストレーター「おうひと佐也可」として活躍中。



『光る実』日本画卒・よ町さん。一般的な漫画のようにパターン化された背景ではなく、圧倒的な画力による森や草むらの繊細な描き方が特徴的な作品。



『絶体絶命電話』大学院デザイン修了・ぬQさん。受講生ではありませんが、漫画を講評しました。歩く自己表現のような人でした(竹熊先生)。現在はアーティストとして幅広く活躍中。



『放課後、雀荘で』環境デザイン卒・坪井慧さん(「マヴォ実験漫画ラボラトリー」より)。4人が雀卓を囲む雰囲気、反転する文字だけで表現。自由な発想と構成がデザインの。

背景とキャラクターが「絵」として融合

枠線と文字だけで構成、「絵のないマンガ」

名だたる作家たちを輩出した伝統あるサークル 漫画部 (旧・漫画研究会)

漫画部(旧・漫画研究会)の歴史は古く、1976年の発足以来、しりあがり寿さん、喜多雅彦さん、山田玲司さんをはじめ、数多くの有名かつ個性的な漫画家を輩出してきました。「漫画業界を目指す人はもちろん、イラストレーターを目指す人や、また最近ではプロにはならなくても表現を発信する手段はありますので、各々の表現手段のひとつとして『漫画』を追求しています。現在漫画部には41名が所属し、年2回部誌『タンマ』を発行して「コミックマーケット」で販売しているほか、描く以外にも著作権に関する知識や技術面の情報交換を行っています。部員たちの専攻は油画や彫刻、デザイン系など様々なので、垣根を超えた情報収集の場ともなっています(漫画部部长・グラフィックデザイン2年・泉希しの☆さん)。



部誌『タンマ8号』1983年

商業誌連載を目指す学科を 超えたコミ ユニティ

学生漫画家インタビュー

すでに商業誌でデビューを果たし、日々漫画制作に励んでいる学生がいます。多摩美にしながら漫画を描き続けることについて、「まわりがみんな当たり前前に創作活動を行っているので、堂々と描いて、人に見せることが恥ずかしくないというのはほかでは得られない環境」、「課題制作と漫画は、見せ方や構築の仕方など、考え方が似ています。両立するというか、補完し合っているような関係です」とのこと。次のステップは、商業誌での連載だと語る4名の学生漫画家に話を聞きました。



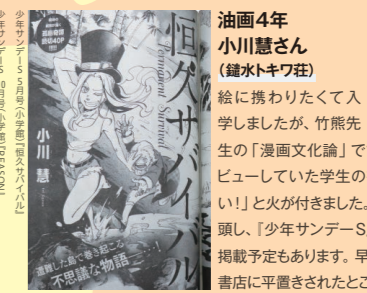
グラフィックデザイン3年 茂木ヨモギさん
『少年サンデーS』に掲載され、現在は連載準備のため修行中です。初めて編集者の方に会う日は緊張して、授業後に竹熊先生を呼び止め心構えを伺いました(笑)。私のジャンルはスポーツ漫画ですが、いつか読者の方から「作品をきっかけにスポーツを始めました」と言われるのが夢です。



メディア芸術3年 星ノ谷圭さん
漫画以外にも広く興味があったのですが、私が選んだメディア芸術が映像やアニメーションなど幅広く学べる学科だったので、その中で「自分はこの先、漫画がやりたい」と考えるようになりました。最近「少年ジャンプ+」でデビューしたばかり。早く「知らない人はいない」というような作家になりたいです。



油画4年 小川慧さん (鍾水トキワ荘)
絵に携わりたくて入学しましたが、竹熊先生の「漫画文化論」ですでに商業誌でデビューしていた学生の存在を知り、「悔しい!」と火が付きました。そこから漫画に没頭し、『少年サンデーS』でデビュー。次の掲載予定もあります。早く単行本を出して、書店に平置きされたところを見たいです。



工芸2年 的野安珠さん (鍾水トキワ荘)
高校生のときに友達の影響で漫画家にあこがれるようになり、受験勉強しながら持ち込みをしましたね(笑)。立体物が好きで多摩美に入りましたが、今は明確に漫画家を目指し、先日「少年サンデーS」でデビューしました。まずは連載を目指し、センターカラーを飾りたいです。

上野毛キャンパスで活動 ストーリー表現研究会

「ストーリー表現研究会」は上野毛キャンパスで統合デザイン学科1期生(2014年設立)が立ち上げたまだ新しい研究会で、表現の一つとして漫画制作も行っています。現在会員は16名で、昨年に続き今年も芸術祭に出展予定です。



芸術祭では、一枚絵や絵本、漫画、アニメーションなどを展示。



漫画制作集団「鍾水トキワ荘」小川さんとの野さんが所属する鍾水トキワ荘は、昨年発足した。本気でプロ漫画家や編集者を目指す集団です。情報交換しながら漫画制作を行うほか、芸術祭への出展などを行っています。

表紙に掲載した漫画家

- 『チャンネルはフテネコのままで』(株式会社 KADOKAWA) 声沢ムネトさん 04年映像演劇専
- 『海獣の子供』(小学館) 五十嵐大介さん 93年油画専
- 『阿・吽』(小学館) おかざき真里さん 90年グラフィックデザイン専
- 『きみはペット』(講談社) 小川彌生さん
- 『ダーリンは外国人』(株式会社 KADOKAWA) 小栗左多里さん 99年グラフィックデザイン専
- 『無限の住人』(講談社) 沙村広明さん 93年油画専



- 『じゃりん子チエ』(双葉社) はるき悦巳さん 油画専
- 『真夜中のヒゲの弥次さん喜多さん』(株式会社 しりあがり寿さん 81年グラフィックデザイン専) (株式会社 KADOKAWA)
- 『弟の夫』(双葉社) 田田源五郎さん 94年グラフィックデザイン専
- 『黒鉄・改』(集英社) 冬目景さん 油画専
- 『帝一の國』(C)古原亮丸(集英社) 古屋亮丸さん 90年油画専
- 『ゼブラーマン』(小学館) 山田玲司さん 89年油画専

フィンランド映画祭 グランプリ獲得

12年グラフィックデザイン卒業・二瓶紗史奈さんの作品が、アニメーションが盛んなフィンランドの「トゥルク・アニメーション映画祭」で、グランプリを受賞しました。作品は、英国のアニメーション制作会社からテレビ放映の依頼を受けて作った『Rabbit's Blood』。これから拠点をカナダへ移し、「世界中から集まるアーティストと交流し感性を磨き、作品を生み出していきたい」と語りました。



トピックス

文化庁創立50周年記念表彰に建畠哲学長

今年で創立50周年を迎える文化庁が、これを記念する表彰を実施。過去50年を振り返り、文化の振興に多大な功績のあった一人として建畠哲学長が選ばれました。

東京都下水道局とアートでコラボ 『#マジカル下水道』

9月10日は「下水道の日」。これに合わせて9月8日に渋谷マークシティで開催された東京都下水道局主催のイベント『#マジカル下水道』に、テキスタイルデザイン専攻の学生が参加しました。今年では若者世代に下水道に関心を寄せてもらうことを目的に、“不思議

(マジカル)”な巨大オブジェとアート作品を展示。同2年・鹿野里美さんがデザインした高さ約4mの巨大なトイレと、幅約6mの壁面に描く巨大アートで不思議な空間を演出し、下水道の役割を表現しました。また、当日は学生によるライブイベントも開催されました。

外館和子教授、南投縣政府文化局より 感謝状授与

共通教育・外館和子教授が、台湾の展覧会「台日・竹と漆の国際工芸研究会」の企画において、「現代漆芸の多様性への20世紀三つの画期」というテーマで基

調講演。南投縣政府文化局より感謝状を授与されました。外館教授は工芸分野の国際公募展の審査員を国内外で務めており、「京畿世界陶磁ピエンナーレ2019(GICB2019)」の国際委員会メンバーにも選出されています。

本学関係者らが参加したクラムボンのMVが公開
6月末に八王子キャンパスで撮影されたバンド・クラムボンのミュージックビデオ『Lush Life!』が公開されています。本ビデオ制作には、カメラマンにメディア芸術・古屋和臣非常勤講師、そのアシスタントを同4年・高橋明裕さん、同3年・田島鈴梨さんが務めたほか、15年グラフィックデザイン卒業・中原シホさんが出演、03年情報デザイン卒業・吉崎響さんが協力するなど、多数の本学関係者が参加しました。ぜひ、下記YouTubeでご視聴ください。
<https://youtu.be/J3lCCKXe998>



演劇系大学、日中共同制作 vol.6『ecstasy ~方円の恍惚~』上演

本学と桜美林大学、玉川大学、桐朋学園芸術短期大学、日本大学の5校により設立された東京演劇大学連盟、通称・演大連。共同制作公演の第6弾となる本作では、演大連と中国の演劇高等教育機関・中央

デザインで被災者支援。 「いまから手帳」制作、配布

7月の西日本豪雨で被害を受けた岡山県・真備町の人々の生活再建をサポートする冊子『いまから手帳』が現地に届けられました。高知県立大学減災ケアラボ(神原咲子教授)による企画監修のもと、プロダクトデザイン・大橋由三子教授と同4年・高谷琴美さん、木村太一さん、大谷京香さんが編集とデザインを担当し、国際NGOのCWS Japanより発行されたものです。家族の基本情報・避難先での診療記録・日記、復興支援制度チェック、各種窓口電話帳がひとつになった記入式冊子で、発災後に必要なニーズが1冊に集約されています。現在はさらなる要請を受け、続編の制作に着手したほか、北海道地震で被災した方に向けた北海道版も制作し、10月4日に現地に届けられました。



戯劇学院がタッグを組み、“演劇”でも“ダンス”でもない、“身体表現の新篇章”に挑戦しました。オーディションで選ばれた演大連の学生12名と、中央戯劇学院の学生12名が出演、9月6日~9日東京芸術劇場シアターイーストで上演されました。

小林敬生名誉教授『一詩画集一宙へ…』刊行
木口木版画の第一人者である小林敬生名誉教授が、建畠哲学長とタッグを組み新作詩画集を刊行しました。本作は、小林名誉教授が2014年に本学の教授職を退任した際に、「版画の原点は『彫って、摺る』こと。だから、印刷と出版に深い関係がある。詩画集で、そうした版画の原点に帰ろうと思った」と考えて制作されたものとなっています。

木口木版画7点と、そのうち6点と対になる詩篇6篇によって構成。繊細かつ幻想的な木口木版と、美術評論とは趣を異にする建畠学長の書き下ろしの詩作が織りなすイメージの創造が見どころです。またこれを記念して、10月9日~20日シロタ画廊にて刊行記念展が開催されました。

『一詩画集一宙(そのへ)へ…』詩=建畠哲、木口木版画=小林敬生、序文=酒井忠康
シロタ画廊 | 10月9日刊 | 179,630円+税



受賞

情報デザイン学科が参画したプロジェクトと 卒業生が「2018年度グッドデザイン賞」

情報デザイン学科が参加したプロジェクト「サステイナブルな『医療』を実現する-八王子モデル-」が、「2018年度グッドデザイン賞」を受賞しました。新しい医療サービスモデルの提案と社会実装が評価されました。情報デザイン学科は、医療法人社団KNI、日本電気株式会社と連携して2016年度から進めている産学共同研究と、3年次の演習「サービスデザイン」(担当:吉橋昭夫准教授)を通じてプロジェクトに参画し、創造的なアイデアで貢献してきました。また、14年情報デザイン卒業・清水覚さんと14年デザイン卒業・菅原竜介さんがデザインに参加した『浮世絵ぶちぶち』(写真)も同賞を受賞。歴史的背景から誕生した目にも喜ばれる緩衝材「浮世絵ぶちぶち」は、すでに商品化されています。



「六甲ミーツ・アート 芸術散歩 2018公募大賞」 でグランプリ受賞

11年大学院油画修了・鈴木泰人さんの現代芸術活動ユニット「OBI」の作品『スラスラチカチカ』が、「六甲ミーツ・アート 芸術散歩2018公募大賞」でグランプリを受賞しました。また、公募アーティストとして07年大学院彫刻修了・木村剛士さんが選ばれているほか、招待アーティストとして00年大学院彫刻修了・井上裕起さん、版画/メディア芸術・開発好明非常勤講師、07年油画卒業・照沼敦朗さんらも出品。照沼さんは「主催者特別賞」を受賞しています。展覧会は11月25日まで兵庫県六甲山上の11会場にて開催中です。



OBI「スラスラチカチカ」

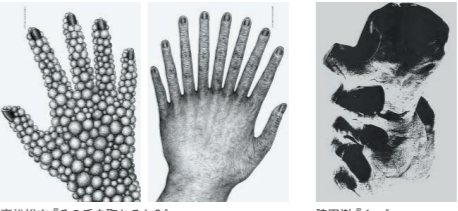
「第66回朝日広告賞」で 佐野研二郎教授が朝日広告賞を受賞

優れた新聞広告を顕彰する「第66回朝日広告賞」にて、統合デザイン・佐野研二郎教授がアートディレクションを担当したCULEN「新しい地図」が広告主参加の部で朝日広告賞と朝日新聞読者賞を受賞しました。また、一般公募の部では、17年情報デザイン卒業・釣瓶昂右さんが準朝日広告賞を受賞。入選に、17年大学院グラフィックデザイン修了・深沢夏菜さん、グラフィックデザイン3年・櫻井万里明さん、佐藤祐太郎さん、11年デザイン卒業・佐藤彩香さん、11年グラフィックデザイン卒業・橋本明花さん。ほか、審査委員賞にグラフィックデザイン4年・熊田かおりさん、学生奨励賞に大学院グラフィックデザイン1年・和田

伊真さんがそれぞれ受賞しました。

「JAGDA 学生グランプリ2018」に在学生在が 多数入賞・入選

今年4回目となる、すべての学生作品を対象として開催されるポスターコンペティション「JAGDA 学生グランプリ」。応募総数1,527作品(累計2,102枚)の中から、グラフィックデザイン4年・高松裕衣さん『その手を取れるか?』と、同1年・脇田樹さんの『ぐっ』の2作品が準グランプリを受賞しました。ほか、「岡室健賞」に同3年・平山弘一郎さん、「福岡南央子賞」を同2年・中村陽道さんがそれぞれ受賞。また、11名が入選、4名が次点に選ばれました。



高松裕衣「その手を取れるか?」

脇田樹「ぐっ」

日本画・奥村彰一副手が 「アダチ UKIYO E 大賞」で優秀賞

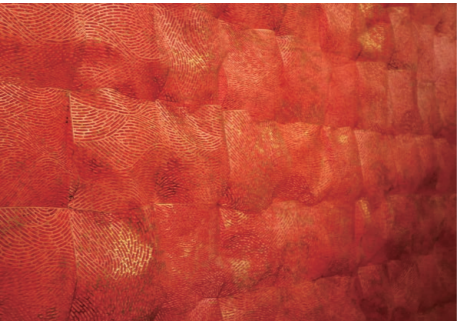
現代の浮世絵を描く才能のあるアーティストを発掘することを目的に、今回ポートフォリオ審査で実施された「第9回アダチ UKIYO E 大賞」にて、日本画・奥村彰一副手が優秀賞を受賞しました。中国に古くから伝わる年画のエッセンスを取り入れた独自の世界観が高く評価されました。

鶴岡真弓教授「第6回河合隼雄学芸賞」を受賞

芸術・鶴岡真弓教授が、著書『ケルト再生の思想-ハロウィンからの生命循環』にて「第6回河合隼雄学芸賞」を受賞しました。河合隼雄学芸賞は、優れた学術的成果と独創をもとに、さまざまな世界の深層を物語性豊かに明らかにした著作に与えられるものです。

「全国大学選抜染色作品展」で卒業生が優秀賞

テキスタイルデザイン・柳下恵助手の作品『在る景色』が、「全国大学選抜染色作品展」にて、優秀賞を受賞しました。同展は、全国の17大学で染色指導を行う教員から推薦された、卒業・修了生の若手染色作家(30歳未満)の作品展。柳下助手は、美術館関係者やジャーナリストたち委嘱委員による審査で選ばれ、9月、京都の染・清流館にて作品が展示されました。



柳下恵「在る景色」

「第7回 FEI PRINT AWARD」で2名が受賞

「アートをもっと身近なものへ!」がコンセプトの版画の祭典、「第7回 FEI PRINT AWARD」で、大学院博士3年・梶谷令さんの作品『また帰って来れるうちに』が準大賞、油画4年・しろこまたおさんの作品「teru O teru 3koma monogatari No.2」が求龍堂賞を受賞しました。入選作品展は9月4日~16日に、FEI ART MUSEUM YOKOHAMAにて展示されました。

研究活動

2018年度科学研究費助成事業 採択者

科学研究費助成事業は、人文・社会科学から自然科学まで全ての分野にわたり、あらゆる学術研究を格段に発展させることを目的とし、独創的・先駆的な研究をする個人の研究者に対して助成が行われます。

●基盤研究(B)(一般)

楠房子教授(情報デザイン学科)
ユニバーサルデザインに基づいたデジタル人形劇の開発と実践

●基盤研究(C)(一般)

久保田晃弘教授(情報デザイン学科)
軌道上展開構造物による衛星彫刻の実現

平出隆教授(芸術学科)
河原温の秘匿された「生涯と制作」の解明

鶴岡真弓教授(芸術学科)
エルミタージュ美術館所蔵「黄金の鹿」の神話と造形表象-「生命再生の鹿角」の研究

佐々木正人教授(統合デザイン学科)
移動開始期の乳児が自発的に「遊びはじめる場所」の研究-保育環境デザインへの援用-

菅俊一講師(統合デザイン学科)
手がかりの提示による空間における身体誘導のための新しいメディア表現方法論の研究

深津裕子教授(共通教育)
西表島の衣文化資源を基盤としたサステナブルデザインとエコツーリズムへの展開

松田嘉子教授(共通教育)
アラブ古典音楽のタクシーム(即興演奏)におけるマカーム(旋法)の構造

高梨美穂准教授(共通教育)
直示動詞「行く」「来る」の母語習得に関する研究

木下京子教授(共通教育)
近世杉戸絵に関わる総合的研究

●若手研究

堤涼子助手(大学院研究室)
住まいの屋外空間における生活者によるデザインの実態とプロセスの研究

●挑戦的萌芽研究

野村辰寿教授(グラフィックデザイン学科)
アニメーション制作における制作環境と変化とその影響に関する調査研究

伊集院清一教授(共通教育)
芸術と芸術療法の他分野融合研究がもたらすもの

●若手研究

●挑戦的萌芽研究

●挑戦的萌芽研究

●挑戦的萌芽研究

●挑戦的萌芽研究

●挑戦的萌芽研究

人事異動

退職(2018年8月31日付)
美術学部 麻生庸子 芸術助手、佐藤美乃里 情報副手

新規採用(2018年10月1日付)
総務部施設室 主事 稲垣雄介(写真)

附属メディアセンター 常勤嘱託 原田要介



多摩美術大学美術館

多摩市落合1-33-1 | 10:00~18:00 | 火曜休館 | 大人=300円 / 大・高校生=200円



10月27日[土]~12月2日[日]
東京国際ミニプリント・トリエンナーレ
2018

ミニプリント作品を世界中から募集し、その最新作を紹介するとともに、学術的なデータ収集もかねた国際公募展の第6回展。94カ国・地域の1,927名の応募作品から、入賞19点を含む324点を選出し展示します。

大賞=Jihye LIM(韓国) | Fat the bed 1801 | mezzotint | 21.5×17.3cm

アキバタマビ21



タマビが運営する新しい創造の場 3331 Arts Chiyoda内にあるアキバタマビ21は、若いアーティストたちが展覧会を行うスペースです。卒業後のキャリア形成支援を目的としており、企画から広報物・アーカイブ作成まで自ら手掛ける企画展を、年間約8回開催しています。

千代田区外神田6-11-14 3331 Arts Chiyoda 201・202 | 12:00~19:00(金・土は20:00まで) | 火曜休場 | 入場無料



10月28日[日]~12月2日[日]
第72回展「セコンドハンド」

誤読可能性のある「セコンドハンド」という言葉のように、本来の意味とは別の文脈や異なる質感をまとめている事象に焦点をあてた展覧会です。

出品作家=衛藤隆世、小池奈緒、西尾佳那、鷲尾伶、wimp

12月8日[土]~2019年1月14日[月・祝]
第73回展「Radical Observers」

出品作家=ジャン・ピンナ、ジン・ロン、盛田溪太、菅実花、ヴァインセント・ライタス、平澤勇輝 キュレーター=三宅敦大

アートテーク



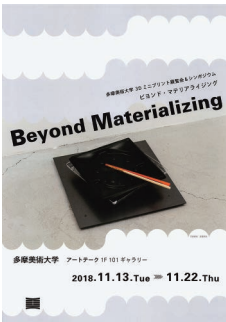
八王子キャンパスの中心に位置する、知と創造の多面的複合施設 アートテーク(Art-Theque)は2015年、旧図書館跡地に建設された施設です。ギャラリー、80周年メモリアルルーム、自由デッサン室(石膏室)、大学院博士後期課程アトリエ、個人コレクション・アーカイブ、竹尾ポスターコレクション・ギャラリー、収蔵庫などで構成されています。

八王子キャンパス内 | 10:00~18:00 | 日曜休館 | 入館無料



11月10日[土]~11月23日[金]
安倍千隆 退職記念展 -太古の足音-

1975年本学彫刻科を卒業、77年同大学院を修了。1989年からは本学彫刻学科において後進の指導にあたり多くの卒業生を輩出してきた安倍千隆教授の退職記念展です。



11月13日[火]~11月22日[木]
Beyond Materializing
本学が開催する東京国際ミニプリント・トリエンナーレ2018(美術館の項目を参照)と同時に開催される「3Dミニプリント展覧会」です。

12月5日[水]~12月7日[金]
Pacific Rim最終発表

12月12日[水]~12月20日[木]
TAMABI select-5-

アーケードギャラリー

八王子キャンパス図書館内 | 9:00~20:30(土・短縮開館日は17:00まで) | 日曜休館 | 入場無料

10月22日[月]~11月14日[水]

Earthquake Japan

多摩美術大学地震ポスター支援プロジェクト・イラストレーションポスター展 / ゲスト・常葉大学

展覧会・公演

大学院 | 横尾忠則 客員教授

兵庫県政150周年記念事業

横尾忠則 在庫一掃大放展

9月15日[土]~12月24日[月・振]

横尾忠則現代美術館

堀浩哉 名誉教授、李禹煥 名誉教授

大学院 | 横尾忠則 客員教授

1968年 激動の時代の芸術

9月19日[水]~11月11日[日]

千葉市美術館

芸術 | 平出隆 教授

言語と美術—平出隆と美術家たち

10月6日[土]~2019年1月14日[月・祝]

DIC川村記念美術館

油画 | 石田尚志 教授

石田尚志「絵と窓の間」

10月20日[土]~11月17日[土]

タカ・インシイギャラリー 東京

統合デザイン | 中村勇吾 教授

未来ののれん展

11月1日[木]~11月11日[日]

Clipニホンパン他

統合デザイン | 深澤直人 教授

民藝 MINGEI—Another Kind of Art展

11月2日[金]~2019年2月24日[日]

21_21 DESIGN SIGHT ギャラリー1&2

新刊

遊びある真剣、真剣な遊び、私の人生
解題:美学としてのグリッドシステム

佐賀一郎 監訳・解題・デザイン
(グラフィックデザイン | 准教授)

ビー・エヌ・エヌ新社 | 5月24日刊 | 3,200円+税



私のティーアガルテン行

平出隆 著(芸術 | 教授)

紀伊國屋書店

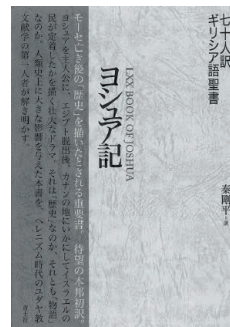
8月28日刊 | 2,700円+税



風景論
変貌する地球と日本の記憶

港千尋 著
(情報デザイン | 教授)

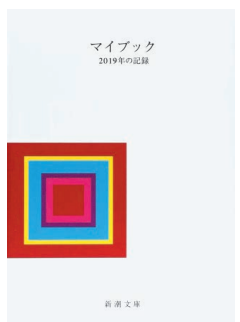
中央公論新社
9月10日刊 | 2,600円+税



七十人訳ギリシア語聖書
ヨシア記

秦剛平 著(名誉教授)

青土社 | 9月20日刊 | 3,600円+税



マイブック 2019年の記録

大貫卓也 企画・デザイン
(グラフィックデザイン | 教授)

新潮社 | 10月1日刊 | 370円+税

「TAMABI NEWS」では受賞や活動報告を募集しています。総合企画室(TEL=03-3702-1168/e-mail=news@tamabi.ac.jp)までお知らせください。



最新情報は www.tamabi.ac.jp をご覧ください

多摩美術大学 広報「TAMABI NEWS」2018年10月31日発行 第27巻 第3号 通巻79号
発行=多摩美術大学 東京都世田谷区上野毛3-15-34 電話=03-3702-1141(代表) 編集=総合企画室 デザイン=村松丈彦

